

言語協約・言語活動の点より見たアポーハ論

岡 田 憲 尚

0. 序

シャーキャブッディ (Śākyabuddhi; ca.660–720) のアポーハ論については、近年の諸研究により、PVSV 85,20 に対する註釈の中で、彼が〈他者の排除〉を顕現 (/ 形象)・個別相・否定一般の三種に分ける解釈を提示することが明らかとされ、この箇所を中心とするシャーキャブッディ説の分析が進められた¹⁾。但し、管見の限りで言えば、この箇所以外にも、シャーキャブッディ註 (PVT) には、ダルマキールティ (Dharmakīrti; ca.600–660) の PVSV に対して〈他者の排除〉を分類しながらこれに註釈する記述が確認される。例えば、ダルマキールティが言語協約 (saṃketa) や言語活動 (vyavahāra) に言及する箇所に対する註釈中にそれを見ることが出来る。実際の言語使用の場面を反省すれば、それは大別して言語協約と言語活動に二分されると言えよう²⁾。従って、本稿では、それらに関する箇所において、シャーキャブッディがどのように〈他者の排除〉を分類して説明しているのかを考察し、彼の思想解明を試みることにしたい。

さて、論点先取となるが、シャーキャブッディは言語活動の際の〈他者の排除〉のあり方を論じる中でこれを分類した上で、その内の個別相に存する〈他者の排除〉を語の比喩的对象と位置づける。そして、後述するように、これと類似の見解はシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita; ca.725–788) のアポーハ論にも見られる。先年、拙稿 [2010] の中で、シャーキャブッディがシャーンタラクシタと同じく純粹否定を間接的な〈他者の排除〉としていることを報告したが、これと同様のことを個別相についても指摘でき得るのである。

1. 言語協約の場合の〈他者の排除〉

ダルマキールティは PV I 110d で言語協約が何を目的 (そしてその結果としての効果) とするものであるかを論じているが、シャーキャブッディはそれを註釈す

るに当たり〈他者の排除〉を次のように分類している。

PVṬ (D127a7–b1, P151a3–5) ad PVSV 57,15–19 & PV I 110d:

そして、それ(=〈他者の排除〉)は二種ある。(1)他者から排除された個別相と、(2)それ(=個別相)の知覚に由来する知に顕現する形象、である。そのことは以前に説明した³⁾。そのうち、語の対象は分別〔知〕に顕現する形象を特質とする〈他者の排除〉である。言語知に顕現するからである。個別相は〔そうでは〕ない。それ(=個別相)は語によって活動を起こす人にとって〔活動の〕対象となるものである。個別相に対して〔人は〕活動を起こすからである。

ここに二種の〈他者の排除〉が示される。そのうち、形象が語の対象として規定される。一方、個別相は語に基づいて起こる活動の対象とされ、語の対象とは区別される⁴⁾。シャーキャブツディはこの偈では二つの内容が説かれている(tshig zur gnyis su smos pa, bzlas pa smos pa)と解釈し、この二種の〈他者の排除〉を挙げた上で、言語協約の目的は「形象を理解すること」と「個別相を獲得すること」の二つにあるとする⁵⁾。すなわち、言語協約の時に形象としての〈他者の排除〉を理解することで、それ以降、言語協約の時とは時間的・空間的に異なる個別相に関する分別の発生が担保され、そして、これにより言語活動時に目的とした個別相に対する活動があり得ることになる。その意味で、言語協約は形象理解だけでなく、言語活動時に起こる個別相獲得も広くその目的として射程に収める。

2. 言語活動の場合の〈他者の排除〉

次に、言語活動の場合の〈他者の排除〉のあり方に関するシャーキャブツディの見解を考察する。ダルマキールティは普遍の外界実在性を否認し、普遍に関する言語活動は知によって確立されると主張するのだが、それに対する註釈の中でシャーキャブツディは言語活動の場合の〈他者の排除〉を(1)個別相、(2)個別相に存する〈他者の排除〉、(3)形象の三種に分類し、次のように述べている。

PVṬ (D78a4–b1, P92a4–b2) ad PVSV 35,2–5:

(1)…それ以外のもの、つまり、〈それを原因・結果としないもの〉と異なる諸事物が普遍などに関するすべての言語活動の拠り所である。次のことが説かれた。その排除された個別相を直接経験することによって生じる分別知、およそ、その〔分別知〕に対して普遍などに関する言語活動がある場合、間接的に、排除された個別相を拠り所とするので、その理由から、言語的活動は〈他者の排除〉を対象とするものと言われる、と。(2)また、何故なら、運用された言葉は、望ましくないものを斥けて、望ましくないものから排除された個別相に対して人に活動を起こさせるから、その理由からも、〈他者の排除〉を対象とするものと言われる。これにより、比喩的に(nye bar btags pas)、語は個別相

に存する〈他者の排除〉を対象とするものとして確立されることが説かれた。(3)およそ、排除された個別相の知覚に由来して分別〔知〕に顕現する形象は他の形象から排除されるから〈他者の排除〉であり、それ（＝形象）は比喩的でないもの（nye bar btags pa ma yin pa'i ngo bo）に他ならず、語の対象である。それこそが言語知に顕現するからである。その場合、言語活動は〈他者の排除〉を対象とするものとして確立する。

以上、三種の〈他者の排除〉の中、(1)〈それを原因・結果としないもの〉と異なる点で他から排除された個別相は言語活動の間接的な拠り所として規定され、そして、(2)個別相に存する〈他者の排除〉⁶⁾は語の比喩的な対象であり、(3)他から排除された形象は語の非比喩的な対象であると説明される。

ここには語／分別知と個別相の間の双方向の関係性を見て取れるように思われる。個別相の知覚に由来して分別知が生じ言語活動が展開されるという点では「個別相→語／分別知」という方向が認められ、一方、語に基づいて個別相に対する行為が起こる点では「語→個別相」という方向が認められる⁷⁾。言語活動に於いて、個別相は語／分別知が発生する間接的原因となり、語／分別知に基づく獲得行為の結果に位置するのである。

ところで、結果的に獲得されるのは一個全体の個別相であるが、言語活動の時には、その個別相上に成立する〈非壺の排除〉等の特定の〈他者の排除〉に焦点が合わされている。すなわち、単なる個別相ではなく、その上に認められる「壺」等と名状化され得るような何らかの性状が語に基づいて行動を起こす際の対象となっていると言える。この個別相に存する〈他者の排除〉をシャーキャブッディは語の比喩的对象と述べ、一方、形象を比喩的でない語の対象とする。

このようにシャーキャブッディが形象と個別相に存する〈他者の排除〉との二つを語の対象としつつ、両者の間に非比喩的／比喩的の差を見ている点は注目に値しよう。仏教論理学・認識論の伝統では個別相と共通相とは各々直接知覚の対象、推理の対象として峻別される。推理知と言語知は本質的に同一であり、従って、本来ならば個別相は語の対象とはなり得ない。しかし、語と個別相との間に何らかの関係性を認めない場合には、整合性（avisamvāda）の問題が発生し得る。外界の個別相と全く関わることなく、これを欺くようなものであるとすれば、言語知は妥当な認識手段たりえないことになる。そのような過失を免れるためにも、シャーキャブッディは「比喩的なもの」と断った上で、個別相上に成立する〈他者の排除〉に語の対象としての地位を認めたものと推察される。

そして、これと類似した見解はシャーンタラクシタによっても示される。彼は、

三種の〈他者の排除〉に論及する中で、「それ（＝個別相）も語の固有の対象であると比喩的に表現される」（cf. TS 1014ab）と述べており、個別相を語の比喩的对象としていることが知られる。一方、この箇所 の PVT に対応するカルナカゴーマン註はシャーキャブッディ説を踏襲したものではなく、〈他者の排除〉を分類する記述自体が確認されず、個別相を語の比喩的对象とする言明も見られない⁸⁾。

3. 結語

以上、言語協約と言語活動に関する箇所 で、シャーキャブッディが〈他者の排除〉をどのように分類し、それを説明しているかを検討した。これにより、次の知見が得られたと言えよう。

(1) 言語協約の場合、〈他者の排除〉は形象と個別相に分類して解釈され、そして、形象の理解と個別相の獲得とが言語協約の目的であるとされる。

(2) 言語活動に関する場面では、〈他者の排除〉は個別相、形象、及び個別相に存する〈他者の排除〉の三種が提示される。個別相は語や分別知が起こるための間接的根拠であり、形象と個別相に存する〈他者の排除〉の二つは、各々、語の非比喩的对象、比喩的对象として位置づけられる。このように語と個別相の間には「間接的」「比喩的」という形で関係性が認められる。

尚、個別相に存する〈他者の排除〉を語の比喩的对象とする見解はカルナカゴーマンの註釈には見られないものであるが、上述したようにシャーンタラクシタにはこれに類似した見解を認めることが出来る。シャーキャブッディ説が後代の学匠にどのような影響を及ぼし、また受容されたかについては更なる考証を必要とするように思われる。

1) Cf. 船山 [2000], 桜井 [2000], Dunne [2004], 石田 [2005], Ishida [2011] 等。

2) シャーキャブッディは言語協約と言語活動の場合とで語のあり方は異なるとする見解を示す。彼は PVI 113b の “tatkartrāśritabhāvataḥ” を “tasmin kartṛbhāva” と “tasminn āśritabhāva” に分解して次の様に述べている。Cf. PVT (D129a5–6, P153a7–b1) ad PVI 113b: [和訳: すなわち、言語活動の時、言葉は他者の排除を為すことによって、それをもたらさないものを排斥する要因となるものであるから、その〈他者の排除〉に関して行為主体 (kartṛ) となる。また、言語協約の時、実在の差異に依拠して起こるから、[言葉は] その〈他者の排除〉に関して依存するもの (āśrita) となる]。すなわち、言語活動の場合、語は異類排除という行為 (= 〈他者の排除〉) の主体となり、そして、言語協約の時、個別相の知覚に由来するという間接的な形で実在の差異 (= 〈他者の排除〉) に依存するものであることになる。カルナカゴーマンは語のあり方を

(92)

言語協約・言語活動の点より見たアポーハ論（岡 田）

言語協約と言語活動の両時で区別し、それぞれ「依存するもの」「行為主体」とする点では基本的にシャーキャブッディ説を踏襲する。但し、言語活動の時の語に関するシャーキャブッディの「他者の排除を為すことによって」という言明は採用せず、代わりに、「固有の対象を表示することを介して、間接的に、それをもたらしえないものを排斥する要因となるものであるから」と述べる（cf. PVSVT 231,16-17）。また、PV I 113のマノーラタナンディン註（PVV）に対応するヴィブーティチャンドラの覚書には、「他者の排除を為すことによって」という表現がなく「固有の対象を表示することを介して」という文言がある点で、カルナカゴーミン註（PVSVT）のものと類似する文章が確認される（cf. Vibhūti 327, fn.6）。管見の限り、ヴィブーティチャンドラの覚書には、PVT にはなく PVSVT のみにあるものと類似する文章が書き写される事例が数多く確認される（cf. Vibhūti 302, fn.4, PVSVT 109,25-26; Vibhūti 303, fn.3, PVSVT 114, 21-22, etc.）。これより、現在に伝わる PVSVT と比較的近い作品をヴィブーティチャンドラは見知っていたものと想定される。尚、シャーキャブッディのように語のあり方を両時で区別する解釈は PVSVT 以外のインド撰述の PV I/PVSV 註には示されていない。マノーラタナンディンはシャーキャブッディとは異なり、PV I 113b を分解せず「その結果の作者である実在に依存するものであるから」（PVV 327,15-16）と置き換えて説明する。尚、シャンカラナンダナはこの句を挙げた後に「言葉は〔他の〕語や対象の排除に対して働くということが説かれたのである」（PVAn (D278b7, P320a5)）と述べるのみである。

- 3) 右の箇所を指すかと思われる。Cf. PVT (D123b1, P145b8-146a1): [和訳: 個別相を本質とする〈他者の排除〉は間接的な形で分別〔知〕に関与するものに過ぎず、顕現〔を本質とする〈他者の排除〉〕はそうではない]。尚、この箇所に相当するカルナカゴーミン註（cf. PVSVT 222,23）はこの記述を欠く。
- 4) この箇所の PVT に対応する PVSVT に〈他者の排除〉を分類する記述は確認できない。但し、言語協約の目的として形象理解と個別相獲得の二点を認める点でカルナカゴーミンはシャーキャブッディと同様の見解を示す（cf. PVSVT 229,10-15）。また、他の註釈書にも〈他者の排除〉を分類する記述はなく、マノーラタナンディンは「排除を知ること」（cf. PVV 326,18-19）と、シャンカラナンダナは「それを結果としないものを欠いたものを知ること」（cf. PVAn (D278a5, P319b7-8)）と述べている。
- 5) Cf. PVT (D127b1-5, P151a5-b2)。
- 6) シャーキャブッディがここで説く「個別相に存する〈他者の排除〉」はダルマキールティが後に述べる「実在にある〈他者の排除〉」に相当するものと思われる。ダルマキールティは、PVSV 39,14-17 で、形象を別異にしない知の根拠は〈他者の排除〉であると主張し、その理由として、〈他者の排除〉が諸実在にあり、その〈他者の排除〉が普遍知の根拠であることに矛盾はなく、言語活動はそのような形で経験されるからである、と述べる。この箇所に対するシャーキャブッディ、及びカルナカゴーミンの説明によれば、その〈他者の排除〉とは〈個別相が異類を欠いたものであること〉であり、個別相に認められるこの性質が形象を別異にしない知の根拠となり、言語活動もこの〈他者の排除〉を根拠にして起こる。Cf. PVT (D89a1-3, P104b7-105a4), PVSVT

172,15–23.

- 7) ダルマキールティは「言語知は錯乱によって人に活動を起こさせるものであるが、実在から生じることで実在と必然関係があれば、実在との整合性があり、そうでなければ、決して整合性はない」(cf. PVSV 49,1–3) として、言語知が実在を根拠として生起したものであるか否かが、翻って言語知に基づいて行動を起こした際に実在を欺くか否かを決定する、との見解を示している。シャーキャブッディによれば、その必然関係は間接的なものである。Cf. PVT (D110a1, P129b5). また、同様の見解は PV I 80d–81b, PVT (D101a1–3, P118b4–7) ad cit, PVSV 76,20–22, PVT (D182b5–183a2, P209a2–7) ad cit にも示される。
- 8) PVSV 35,2–4 に対するカルナカゴーミンの註釈は以下の通りである。Cf. PVSVT 155,2–6: [和訳: この理由 (= 諸事物が言語活動の拠り所であること) から、〈他者の排除〉を対象とするものと言われる。しかし、〈他者の排除〉はそこに顕現しない。同一形象を持つ外界物こそが肯定的なものとして顕現するからである。*また、何故なら、運用された言葉は*, 人に、望ましくないものを斥けて、望ましくないものから排除された個別相に対する活動を起こさせるから、この理由からも、〈他者の排除〉を対象とするものと言われる。但し、〔〈他者の排除〉の〕顕現に依存するものではない。肯定が顕現するからである。] (*を付した箇所は、写本に基づき、刊本の “yasmāc ca niścayaprayuktaḥ” を “yasmād dhvaniś ca prayuktaḥ” に校訂)。

〈文献と略号〉

TS: *Tattvasaṃgraha* (Śāntarakṣita): S.D.Shastri, ed., *Tattvasaṃgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary “Pañjikā” of Shri Kamalaśīla*, Varanasi, 1968; PV I: *Pramāṇavārttika*, chapter I (Dharmakīrti): See PVSV; PVAn: (Pramāṇa)-vārttikānusāriṇī (Śāṅkaranandana): D.4223, P.5721; PVT tib.: *Pramāṇavārttikaṭīkā* (Śākyabuddhi): D.4220, P.5718; PVV: *Pramāṇavārttikavṛtti* (Manorathanandin): R.Sāṅkṛtyāyana, ed., “Dharmakīrti’s *Pramāṇavārttika* a Commentary by Manorathanandin,” Appendix to *JBORS* 24–26, 1938–1940; PVSV: *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti): R.Gnoli, ed., *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*, Roma, 1960; PVSVT: *Pramāṇavārttikavṛttiṭīkā* (Karnakagomin): R.Sāṅkṛtyāyana, ed., *Karnakagomin’s Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Kyoto, 1982; Vibhūti: Vibhūticandra’s note. See PVV; Dunne [2004]: John D. Dunne, *Foundations of Dharmakīrti’s Philosophy*, Boston; Ishida [2011]: Hisataka Ishida, “On the Classification of anyāpoha,” in H. Krasser et al., eds., *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis—Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference*, Wien; 石田 [2005]: 石田尚敬「〈他の排除〉の分類について」『インド哲学仏教学研究』12号; 岡田 [2010]: 岡田憲尚「間接的に知られる〈他者の排除〉について」『仏教学』52号; 桜井 [2000]: 桜井良彦「Dharmakīrti, Śākyabuddhi, Śāntarakṣita の Apoha 論」『龍谷大学大学院研究紀要 (人文科学)』22号; 船山 [2000]: 船山徹「カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」」『哲学研究』569号。

〈キーワード〉 アポーハ, 他者の排除, シャーキャブッディ

(筑波大学非常勤研究員)